横浜キネマ倶楽部
第５３号　会報
2019年3月2日発行

第５３回上映会

喜劇 大風呂敷

中平康監督作品

１９６７年／日本／カラー／８５分／ブルーレイ上映

(C) 日活

2019年3月2日（土）

［上映時間］　１３：３０
［講　　演］　１５：００～１６：００　講師：佐藤利明さん（娯楽映画研究家）
［会　　場］　横浜市南公会堂

～ 桂　歌丸さん追悼 ～

心よりご冥福をお祈りいたします

桂　歌丸さん略歴

1936年、横浜市生まれ。1951年、五代目古今亭今輔に入門。のち四代目桂米丸門下に移り、1968年に真打昇進。『笑点』(日本テレビ系)には1966年のスタート時から出演。番組50周年を機に卒業し、終身名誉司会者となる。2005年に芸術選奨文部科学大臣賞、2007年に旭日小綬章、2016年に文部科学大臣表彰。落語芸術協会会長、横浜にぎわい座館長(二代目)などを務めた。2018年7月2日逝去。享年81歳。

[物　語]

ベトナム戦線の砲撃が止んで四十八時間停戦を迎えたある日、フンドシを頭上にかかげた一人の男が米軍陣地へ駆けこんできた。いままで終戦を知らず、満州の奥地をさまよっていたという男の名は大野馬六。米軍に歓待されたあと、日本人工作隊員の丸太小屋へ案内されると、丁半博打の真最中。博打好きの馬六は早速手を出すと、これがツキにツキまくり、大工の吉三をも打ち負かしてしまった。吉三は博打のカタに娘の友子を馬六の嫁にくれてやると言い出すが、戦闘服に身を包み、鉄砲をかまえた勇ましい姿の友子を一目みた途端、馬六は逃げ出してしまった。停戦が終わり、再び戦闘が始まると、馬六はドサクサにまぎれて輸送船に乗りこみ、こっそり日本へ向った。淡路島で待っている恋人・秋代のことをひたすら祈りながら。瀬戸内海　淡路島。馬六は上機嫌で故郷の土を踏んだが、やがてフイアンセだったはずの秋代が、この島一の醸造元 島野健吉と結婚していると聞いてビックリ仰天。母が止めるのも聞かず、秋代のもとへ走り出していくが…。

『喜劇　大風呂敷』　(C)日活

[スタッフ]

監督・・・中平康
脚本・・・才賀明
撮影・・・高村倉太郎
音楽・・・山本直純
美術・・・坂口武玄

[キャスト]

大野馬六・・・藤田まこと
留吉・・・・・桂歌丸
島野健吉・・・三遊亭円楽
鉄・・・・・・柳亭小痴楽
島野秋代・・・芦川いづみ
今井友子・・・木の実ナナ
今井吉三・・・花沢徳衛
大野コマ・・・ミヤコ蝶々

(C)日活

【 中平康監督 プロフィール 】

東京都生まれ。父は洋画家・高橋虎之助、母はバイオリンの教師で、芸術環境に恵まれて育つ。1948年、東京大学文学部美学科に入学するが、難関だった松竹大船撮影所の助監督募集に合格して中退。川島雄三、木下惠介、渋谷実らや当時松竹と契約していた黒澤明の助監督を務める。有能な働きぶりと才気を見せ、黒澤からは厚い信頼を得たという。製作再開した日活に移籍し、56年、太陽族と呼ばれた若者たちの奔放な青春を描いた石原慎太郎脚本「狂った果実」でデビュー。ドライでスピードのある演出で新人・石原裕次郎をたちまちスターにし、経営難だった日活を破格の大成功に導く。題材に合わせて自由自在に演出スタイルを変え、都会的な感覚で料理。日活きってのテクニシャンとして大映の増村保造、東宝の岡本喜八、東映の沢島忠と並ぶ活躍を見せる。生涯のトレードマークとなるベレー帽を被り、舶来品を着こなすダンディズムと、テーマ主義の旧弊を否定した作風は一致していた。国民的大スターとなった裕次郎との「あいつと私」(61)は年間配収第3位で、自身の最大のヒットとなる。キレのある演出であらゆるジャンルをこなすのが身上だったが、加賀まりこが初老のパトロンを持つ娘をコケティッシュに演じた「月曜日のユカ」(64)からは「猟人日記」「砂の上の植物群」(64)など、エロティシズムを独特に描く野心的な展開を見せる。66年より約2年間は香港のショウ・ブラザーズに招聘され、自作のリメイクなど数本の香港映画を監督。日活を離れた後の71年、私財を投じて中平プロダクションを設立し、状況劇場の唐赤児主演「闇の中の魑魅魍魎」(71)を発表。カンヌ映画祭出品作となった。中平プロ＝ATG 提携「変奏曲」(76)が最後の作品になる。病気で倒れた78年にはテレビドラマを病院から撮影所までタクシーで通って演出し、完成後に胃ガンで死去。

―KINENOTEより抜粋―

【 講師：佐藤利明さん プロフィール 】

1963年生まれ。娯楽映画研究家・オトナの歌謡曲プロデューサー。
娯楽映画をテーマに、キャストへのインタビュー、新聞連載、数多くの映画ソフトの企画・解説などマルチに活躍中。
歌謡曲・ジャズ・サントラなど幅広いジャンルのCDを企画、音楽プロデューサーとしても活躍。
クレイジーキャッツ結成50周年CD『HONDARA盤』『HARAHORO盤』、DVD「植木等スーダラBOX」をプロデュース。
構成作家・ラジオ・パーソナリティとして、2015年文化放送特別賞受賞。
共著に『無責任グラフィティ クレージー映画大全』(フィルムアート社)『最後のクレイジー 犬塚弘 ホンダラ一代、ここにあり！』(講談社)。
著書『植木等ショー！クレージーテレビ大全』(洋泉社)『クレイジー音楽大全 クレイジーキャッツ・サウンド・クロニクル』(シンコーミュージック)など多数。

≪≪　2018年12月24日 第52回上映会「孤獨の人」　≫≫

来場者数： 169　　アンケート回収数：45枚　　回答率： 26.6%

【作品についての評価】

- とても良かった　19枚　42.2%
- 良かった　20枚　44.4%
- あまり良くなかった　1枚　2.2%
- 良くなかった　1枚　2.2%
- 無印　4枚　8.9%

(C)日活

〈感想〉

（とても良かった）

●こんなに空席があるとは思わなかった！「平成最後の天皇誕生日の翌日」「津川雅彦追悼」「原作者はジャニーズ事務所の女帝と言われる方の夫」など、観客が押し寄せる要素がいくつもあるのに、空いているのでショックでした。 映画は「さわやかな青春映画」という感じで「ローマの休日」に通じるものがありました。よい意味で予想と外れました。

●ミッション・スクールで教育を受けました。シスターの1人は美智子様と大学が同窓で、図書館にはこの本があり、高校の頃の必読書でしたが、全く内容はおぼえてません。今回この作品を観てなつかしい役者が多くでていて、思わず拍手しました。・・・女性のアクセサリー、衣装もステキで、言葉使いの美しさも見事でした。T.V.放送して多くの人にみてもらいたい作品です。（津川雅彦追悼作とかで。。。）

（良かった）

●皇室関係者と同級生になってしまうと色々な意味で大変なんだと思いました。学習院や目白駅、今ではまったくおもむきが変わってしまいましたが、独特のふんいきがたまらなく良かったです。貴重な作品をみることが出来、良かったです。実際には成けい大。

●平成の？代も丁度終わる時、昨日は天皇誕生日でした。感慨深いものがあります。

●限りなくc（あまり良くなかった）に近いが、映画製作としての制約があったことを考えると、よく出来ているということだと思います。

●当時の風俗が分かった。映画がジャーナリズムだった頃の作品だと思った。よく映画になった、あるいは映画化したと思う。

（良くなかった）

●やはりズレている。話題性で取り上げは個人的には感謝してます。（封切時観たが，２～３シーン以外全く忘れていました！）

【シンポジウムについての評価】

- とても良かった　19枚　42.2%
- 良かった　14枚　31.1%
- あまり良くなかった　2枚　4.4%
- 良くなかった　0枚　0.0%
- 無印　10枚　22.2%

〈感想〉

(とても良かった)

●学習院では、ロケでもなかった話、学習院の学生だった三谷代が映画に出たことによって退学になった話、三谷代とはすみ代の秘話等よかったです。三谷代の運命を変えた作品、孤独の人とのまとめ！質問コーナー、中々面白かったです。

●三谷礼二さんを紹介、コメントに感謝(小生は、三谷達実さんの後輩です。)今渋谷シネマヴェーラで達実さんセレクトを上映中で因縁を感じます。

●上から目線(どうだ、オレは知ってるぞ)ではなく誠実な話し方がよかった。

(良かった)

●日活の映画、青春時代よく見ました。今でも裕次郎の歌はCD沢山持っています。91回地球一周の旅でピースボートで音楽かんしょう企画しました。

●一般的に知られていないエピソードも聞くことができてよかった。

●いろんな背景が理解できて、楽しい勉強会のようでした。蓮見重彦の映画評は読みにくくて大変ですが、マイナーな監督の作品を多く評価していて、はずせない方です。鈴木清順の話を聞いて納得しました。スゴイ！！！

(その他)

●高崎俊夫氏のお話も大変興味深く伺いました。講演後の質疑の時に「銀座の場面はロケで撮った」と1週間前に「小林旭コンサート」で聞いたばかりだったので一言報告させていただきました。 12/17に関内ホールのコンサートで、小林旭はこの映画は自分の転機になった作品である、と「孤獨の人」について、かなり詳しく話していました。また、「僕は横浜が大好きでロケで来たり裕ちゃんと飲みに来たり、第二の故郷と思うくらい横浜に特別な想いを持っています」と語っていました。 小林旭は、この映画の上映を知らなかったのでしょう。彼が「来週この横浜でこの『孤獨の人』の上映があります」と舞台で話していたら、関内大ホールの満員の観客がこちらに押し寄せたことでしょう。残念！ それでも、何十年間の悲願であった映画を観て、おもしろいお話を聞いて、おまけに十数年ご無沙汰していた？？？？？さんともお会いして(帰りに黄金町の喫茶店でおしゃべりしました)すばらしいクリスマス・イブでした。 ありがとうございました。

≪ アンケートご協力ありがとうございました♡ ≫

<<<　キネマ倶楽部のページ　>>>>>

「万引き家族」と小津安二郎映画

運営委員　服部　太加志
（映画検定1級　第5回田辺・弁慶映画祭映画検定審査員）

是枝裕和監督の「万引き家族」が日本の映画賞の中で最高の権威と言われるキネマ旬報ベストテンの日本映画ベストワンに選ばれた。「万引き家族」は昨年のカンヌ映画祭のパルム・ドールも獲得し、さらには、アカデミー外国語映画賞にもノミネートされ、さらには、日本アカデミー賞にもノミネートされており（まあ、本家のアカデミー賞に比べて、そこまでの権威はないが）、「万引き家族」が2018年の日本映画を代表する映画である事は間違いないだろう。

僕は、「万引き家族」は3回鑑賞しているが、初回鑑賞した時から、「万引き家族」という映画は、小津安二郎監督からの影響を強く受けていると感じた。見知らぬ子供を家に連れてきて、同じ家族で暮らしていくという設定は、小津安二郎監督の「長屋紳士録」を思わせるし、無学な父親である治と学校には行っていないものの賢い祥太との関係は、同じく、小津監督の「出来ごころ」を思わせるし、終盤で離れて暮らすようになった治と祥太が久しぶりに会って、川で釣りをするシーンは、同じく、小津監督の「浮草物語」で何年も顔を合わせていなかった旅役者の喜八と息子の信吉が川で釣りをするシーンを思わせる。

「長屋紳士録」は見知らぬ子供を連れて来て、最初は嫌な顔をしていた飯田蝶子演じるおたねがだんだん子供が愛しくなっていくのと「万引き家族」で家に連れてきたじゅり（呼び方はゆり）と一緒に万引きするのが邪魔だと思う祥太がだんだん実の妹のように可愛がるようになるのがよく似ている。（「万引き家族」ではじゅりを庇う為に祥太が万引きしてしまい、店員に追われて逃げるシーンがあるのだが、僕は、そのシーンで、逃げろ、捕まるなとスクリーンに向かって祈っていた。それだけ、祥太に感情移入してしまっていたのである。）「長屋紳士録」も「万引き家族」もラストでは、どちらの子も、元の家に引き取られるのだが、ハッピーエンド的な結末である「長屋紳士録」と違い「万引き家族」のラストは苦い結末である。じゅりはこれからどうなるのだろうか。

「万引き家族」で祥太が治に話す小さな魚でも力を合わせれば大きな魚をも倒せるというスキミーの物語は、貧しい家族でも一致団結すれば、金持ちや権力者にも負けないという主人公一家の例えでもあるが、魚のスキミーの話は「出来ごころ」で息子の富夫（演じるは名子役の突貫小僧）が父親の喜八に言う「海は何でしょっぱいか知ってる？、鮭がいっぱいいるからしょっぱいんだよ」というセリフのオマージュでもあるだろう。（まあ、これはさすがに少し強引か）「万引き家族」で、警察に捕まった治が「万引きくらいしか他に教えられる事がなかった」と言うセリフには無学な治が学校に行っていない祥太に他に何も教える事ができなかったという無念さが滲み出ており、僕は、「出来ごころ」で級友から父親の喜八を新聞も読めない馬鹿な父ちゃんと馬鹿にされた富夫が喜八に殴りかかり、喜八が自分の無学を恥じるシーンを思い出した。まあ、「出来ごころ」と「万引き家族」ではこちらも対照的な結末であるのだが、無学な父親と賢い男の子の物語として共通点は多いだろう。

「浮草物語」は「長屋紳士録」や「出来ごころ」と違い、悲劇的な結末だが、夜汽車に乗り込む旅役者の喜八と女房のおたかには新天地へと旅立つ希望があったが、「万引き家族」の治と祥太はおそらくもう2度と会えないだろうし、じゅりは以前のように虐待されるだろう。ラストが重くやりきれない分、「浮草物語」で、喜八と息子の信吉が川で釣りをするシーンが微笑ましいシーンになっていたように、治と祥太との釣りのシーンは強く印象に残る。（治が祥太に唯一教える事ができた万引きによって、祥太が手に入れた釣竿で釣りをするというのが2人の絆の強さを表している。）

是枝裕和監督のここ最近の作品は、「万引き家族」以外にも、意識的にか、無意識にかわからないが、小津安二郎監督の影響を強く受けている。是枝監督のここ最近の作品は、「そして父になる」や「海街 Diary」や「海よりもまだ深く」など家族をテーマにした作品が多いが、「海街 Diary」は鎌倉が舞台の四姉妹の物語という事で、明らかに、小津監督を意識しているし、「そして父になる」と「海よりもまだ深く」は戦前の小津監督がよくテーマにしていた父と息子の物語であり(小津安二郎監督の映画といえば、「東京物語」、「晩春」、「麦秋」の紀子三部作に代表されるように、父と娘の物語が多いイメージだが、戦前は、「出来ごころ」や「浮草物語」や「父ありき」など父親と息子をテーマにした物語を多く撮っている。)、異色作である「三度目の殺人」でさえも、家族の問題はクローズアップされている。

是枝裕和監督の「万引き家族」を観て感動した人は、小津安二郎監督の「長屋紳士録」や「出来ごころ」や「浮草物語」をぜひ観てみて下さい。小津監督の作品の中ではそれほど知名度が高くないかもしれませんが、3作品共傑作です。晩年のブルジョア階級の父親と娘の物語しか知らない方が観ると新鮮だと思います。戦前の小津安二郎監督は、「出来ごころ」や「浮草物語」など貧しい家族の物語を多く撮っており(「出来ごころ」と「浮草物語」と「東京の宿」は主人公が坂本武演じる喜八という無学で貧しい男なので、喜八ものと呼ばれている。)、僕は、個人的には、小津監督には、戦後も、喜八ものを撮って欲しかったのですが、やはり、興行成績を気にする松竹が許さなかったのでしょうか、それとも、晩年の巨匠になった小津監督には、貧しい喜八を主人公にした物語など興味がなくなったのでしょうか、個人的には、前者であって欲しいと思っております。

カンヌ映画祭でパルム・ドールを獲得した事で、是枝裕和監督は、名実ともに、日本を代表する巨匠となった。晩年の巨匠になった小津安二郎監督は、ブルジョア階級の物語を多く撮り、若い人に反発されたが、僕は、是枝監督には、これからも、「万引き家族」のような弱者の視点で描いた傑作を多く撮って欲しいと思っております。

-参考- 「出来ごころ」 小津安二郎監督 出演:坂本武 突貫小僧 1933年製作
(1933年度キネマ旬報ベストテン第1位作品)
「浮草物語」 小津安二郎監督 出演:坂本武 飯田蝶子 1934年製作
(1934年度キネマ旬報ベストテン第1位作品)
「長屋紳士録」 小津安二郎監督 出演:飯田蝶子 笠智衆 1947年製作
(1947年度キネマ旬報ベストテン第4位作品)

<<<<< 2019年横浜キネマ倶楽部活動予定 >>>>

3月 2日 第53回 上映会『喜劇 大風呂敷』 横浜市南公会堂
4月13日 全国映連 定期総会 参加予定 岩波ホール
6月16日 第54回 上映会『神宮希林 私の神様』 横浜市健康福祉ホール(桜木町)
6月 コミュニティーシネマ総会 参加予定
7月13日～15日 全国映連 映画大学 参加予定 福岡市
9月14日～15日 全国映連 映画フィスティバル 参加予定 札幌市
秋から冬 『日曜日の子供たち』『寿ドヤ街 生きる』『寿ドヤ街 生きる2』を上映予定
・・・毎月1回運営委員会開催・・・

次回第54回上映会お知らせ

『神宮希林　わたしの神様』

2019年6月16日（日）

上映時間　①11：30～
②14：30～

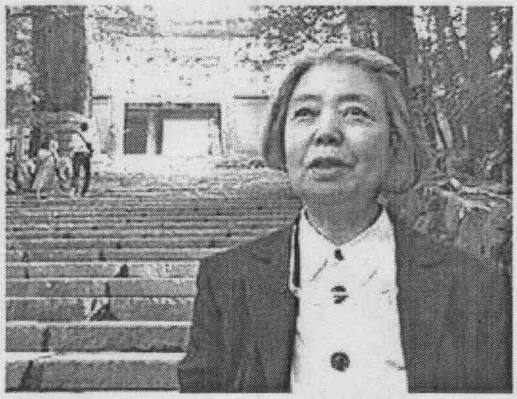
講演：13：10～14：10
講師　阿武野勝彦さん　（本作品プロデューサー）

〔入場料〕
前売 1,000円　当日 1,300円
障がい者 1,000円（介助者1名無料）

〔会場〕
横浜社会福祉センターホール
（横浜市健康福祉総合センター4階）045-201-2060

地図

ＪＲ京浜東北・根岸線「桜木町」駅／横浜市営地下鉄「桜木町」駅　徒歩１分



（２０１４年/日本/９５分/ドキュメンタリー/ブルーレイ上映）
旅人：樹木希林
プロデューサー　阿武野勝彦
音楽　村井秀清　　音楽プロデューサー　岡田こずえ
撮影　中根芳樹／谷口たつみ
音声　福田健太郎　　TK　須田麻記子
効果　久保田吉根　　取材　佐藤岳史
編集　奥田繁
制作協力　ホーボーズ　松永英隆　船戸秀生　小林敬
協力　神宮司庁神社本庁
監督：伏原健之
(C)東海テレビ放送

横浜に映画ファンの思いが反映される映画館を作ろう！

横浜キネマ倶楽部は、横浜で永年親しまれてきた映画館の相次ぐ閉館を惜しむ映画ファンが集まり、2005年5月発足し、「横浜に映画ファンの思いが反映される映画館をつくる」ことを目標に掲げて活動を続けています。会の存在をより多くの皆様に知っていただき、映画館をつくる目標に一歩でも近づけたい、それと同時に良質な映画を上映することで、映画ファンの交流の場を提供したい、という思いで年４回の上映会を行っています。

横浜キネマ倶楽部会報

発行：横浜キネマ倶楽部

〒231－0062　横浜市中区桜木町1-1-56
横浜市市民活動支援センター　No.85
横浜キネマ倶楽部
TEL：080－8118－8502（10時～18時）
Eメール：yokohama_kinemaclub@yahoo.co.jp
HPアドレス：http://ykc.jimdo.com